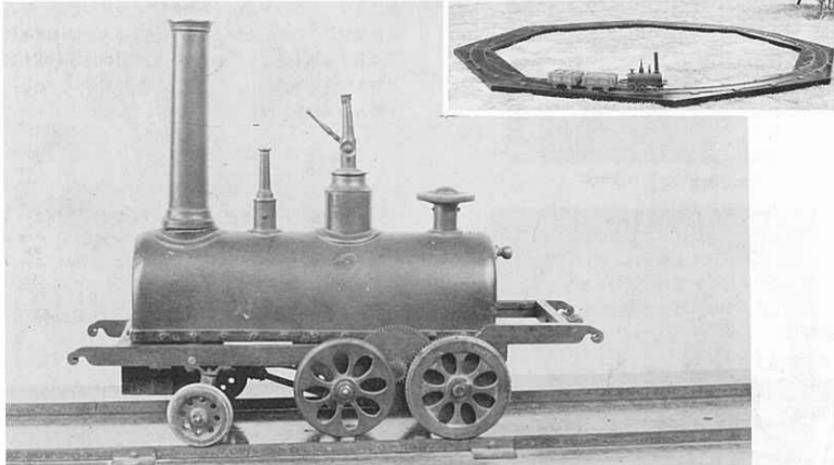


佐賀県立博物館
昭和
50.6.25

No. 18

博物館報



日本最初の蒸気車雰形

佐賀十代藩主鍋島直正（1814～1871）は、西洋文明の摂取につとめ、嘉永5年（1852）、佐野常民を主任に理化学研究所として精煉方を設けた。長崎警備にあたっていた佐賀藩士本島藤太夫の手記「松乃落葉巻2」によると、嘉永6年（1853）7月24日精煉方の中村奇輔等が長崎寄港のロシヤ使節チャーチンの旗艦ハルラータル号の官室で円台を走る蒸気車の雰形を見ている。当時蒸気船の製造を試みていた精煉方では、中村奇輔、石黒寛次、田中儀右衛門の願いにより、安政2年（1855）8月1日、蒸気船蒸気車雰形の製造許可を得、その製作にとりかかった。

現存する蒸気車雰形の1組は、金属製の機関車と木製貨車2両及び内径3.44吋のレール盤（8枚組合せ）である。機関車の全長39.7寸、車輪幅14.3寸、全高31.2寸でアルコールを燃料として2基のヒストンが歯車を通して車輪に運動する仕組みとなっている。材質は、ボイラーパー部が鉄物、その他は真鍮で、取りつけの部分はすべてインチネジを使用し、基台の両面は唐草模様の毛彫りをほどこしてある。なお、陸内松鶴筆の「精煉方絵図」には、多布施の精煉方の中庭で、藩主直正は多くの家臣が見守るなかを煙をはいて運転されている模様が描かれていて興味深い。

この蒸気車雰形は、わが国最初の蒸気車の模型であるばかりでなく、蒸気機関の実用化の嚆矢であって、資料的価値は極めて高い。なお、この雰形は、東京鍋島家から当館へ寄託されたもので、昭和34年に鉄道記念物（第11号）に指定されている。

目次

日本最初の蒸気車雰形.....	1
常設「佐賀県の歴史と文化展」紹介.....	2・3
郷土の新遺跡資料展紹介.....	4
鍋島藩窯展紹介.....	5
第12回研究講座.....	6・7
博物館日誌・行事お知らせ.....	8

常設展紹介

佐賀県の歴史と文化展

主催 佐賀県立博物館
会場 佐賀県立博物館
会期 1月10日～3月31日
(9時から16時30分まで)
休館日 毎週月曜日および国民の祝日の翌日
観覧料 大人 大・高生 中・小生
個人 50円 30円 20円
団体 (30) (20) (10)
(団体は20名以上)
成人の日は無料。
※県内の生徒・児童が教育活動として教師の引率
により利用する場合は、事前に申し込んでいた
だければ、観覧料は無料となります。所定の申
し込み用紙は当館事務室に用意しております。

展示概況

自然史 (1号展示室)



エヒメアヤメ

花径4cm位、毎年4月上旬頃脊振山地の
南麓に可憐な花をみることが出来る。

佐賀県の歴史と文化を紹介する自然史の展示は、地球の歴史と人間生活の歴史を結ぶ展示とし、併せて自然界的現況を紹介するための展示にした。

佐賀県の地図を紹介するコーナーは、大型地質図パネルと玄武岩、安山岩、流紋岩、花こう岩、蛇紋岩、球状閃緑岩、結晶質石灰岩、石英、砂岩など、県内産岩石標本の1面を研磨し、美しい岩石の組成をみせる展示とした。また、第3紀層から出た化石も、代表的なものをえらび展示了。

自然界の現況を紹介するものとしては、古生代に栄えた、現在も生息する化石生物であるカブトガニの発生状

況を、伊万里湾で採集した標本と生態写真によって紹介したのをはじめ、有明海干がたと生物模型、県内昆虫標本(甲虫、チョウ、トンボ類)などである。

今回はじめて陳列する「エヒメアヤメの開花生態」模型は忠実に生態を復元している。自生地のうち佐賀市川久保帶隈山は国の天然記念物指定地として保護されている。

もともと、この植物は大陸性の草本で、脊振山地の南麓に点々として自生しているが、その数は少なく、限られた地域しか自生しない。従って一般の人々には開花状況はあまり知られていないので、観覧者の注目をひく展示の1つであろう。

考古 (2号展示室)



西有田町坂の下遺跡出土・顔面把手

近年の編年史的研究により、当考古部門でも、県内に人類が住みつけた約15,000年前の先土器時代から、農耕文化が栄え、社会機構が整いつつあった古墳時代に至るまでの、各時代の人々が使用した各種遺物を時代順に展覧した。

先土器時代では、当時唯一の利器である石器の多久市三年山・茶園原遺跡出土の尖頭器や、先土器時代終末期の馬渡島・切立遺跡出土の各種細石器を、繩文時代では約10,000年前の始源期の土器から、末期の約3,000年前の土器を文様によりその変遷をたどった。また、石槍・尖頭器・石鎌・石斧・石匙・スリ石等の各種石器を遺跡ごとに集約し、土器と石器の時代関係を追求した。

弥生時代では、農耕生活がうかがえる初期の炭化米や石臼壠、中期の埋葬様式のひとつである甕棺や、人間と共に埋置され石棺や甕棺より出土する銅鏡、武器、装身具等をも展示し、古代国家が形成される要素を考えてみた。

県内における古墳文化は、4世紀末から7世紀まで継続するが、この時代の遺物を金銅製冠や、金製垂飾・耳環・腕飾・首飾等の装身具類及び、皿・壺・椀・辯などの日常需要に応じて生産された土師器や須恵器、また農具・木工具・鉄工具等の生産用具類、鉄刀・鐵鎌・大刀等の武器類、短甲などの武具、杏葉・辻金具・雲珠などの馬具類、手握土器や土製および滑石製模造品の祭器等を一堂に展示し、郷土の原始～古代の姿を浮彫に表現した。

歴 史（3号展示室）



伝竜造寺隆信着用の鎧

歴史部門は、仏教関係資料として、八字文珠菩薩騎獅図像、不動明王三尊図像、大般若經写本、紺地金泥法華經写本など仏画、写経本を中心に郷土の仏教美術の1部を紹介した。

近世資料は、竜造寺隆信関係及び文禄、慶長の役に関する肥前名護屋城関係の資料を中心に近世における肥前の動きをとらえる資料を展覧した。なかでも、竜造寺隆信、政家着用の鎧は（村田満子氏寄託）当館での初公開の資料で異彩を放っている。

幕末、維新資料として、精煉方製造の蒸気車頭形、蒸気船頭型、パリ万博の土産品（慶応3年）戊辰戦争資料等を中心に佐賀藩の動向が感知されるよう展覧した。また、南面固定ケースは、先覺者の特設コーナーとして、その書画を中心人物の紹介にあたった。主なものは、洪浩然、鍋島綱茂、鍋島治茂、古賀精里、古川松根、草場佩川等の書幅や屏風で、いずれも常設展では初公開の資料である。

美術工芸（3号展示室）



百武兼行「老婦人像」



染付日輪山水図平皿径21cm 高4cm

なお、今回は、3月5日から3月24日まで、鍋島藩窯展を開催するので藩窯関係は割愛した。

美術の工芸部門は、絵画コーナーで、今回は本県出身の近代日本画家、洋画家ならびに現代洋画家の作品をとりあげた。

百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助の3人の代表的洋画家をはじめ、独自の画境を拓いた小代為重、高木背水、三根霞卿、腹巻丹丘、御厨純一、山口亮一、北島浅一、武藤辰平、松本弘二、高柳種行、田原輝、納富進、石本秀雄の各々の代表作を展覧し、佐賀画壇を概観できるようにした。

工芸部門では、まず古唐津系の古窯である板洞窯、帆柱窯、道園窯、皿屋窯、椎峯窯、藤の川内窯などの茶碗を、また磁器では、最近入手した数点を加えて初期伊万里を展示している。磁器創業時代の磁肌と染色の色は、その後の肥前磁器発展の源として現在見直されている。

その他の柿右衛門等の色絵は今回は「藩窯展」の準備等のため割愛した。

郷土の新遺跡資料展

名称：郷土の新遺跡資料展

主旨：近年、県内各地で数多くの遺跡が発見された。

その結果、先土器時代から縄文時代への編年の確立が試みられ、人類初期の住居である洞穴、岩陰遺跡が明らかとなり、有明海沿岸においても縄文時代初期の遺跡が確認された。

また、弥生時代における大カメ棺群や、弥生時代から古墳時代へと移行する時の墓である、方形周溝墓の調査が行なわれるなど、多大の成果が挙げられているほか、江戸時代初期の古窯跡にも年々科学的な調査が実施されるようになった。

そこで、これらの新発見資料を県内市・町・村教育委員会の協力を得、これらの資料を一堂に展示し、最近の発掘調査の成果を広く県民に紹介するとともに、郷土の原始・古代文化ならびに江戸期の古窯跡等の理解と、文化財保護意識の高揚に資する。

主催 佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館

場所 佐賀市城内1丁目15の23

佐賀県立博物館

会期 昭和49年1月20日～2月8日

展示内容

○〔先土器時代〕

- 三日月町・老松山遺跡出土品（刃器、尖頭器、敲打器）
- 三日月町・権現山遺跡出土品（刃器、敲打器）
- 呼子町・小川島採集品（台形石器、ナイフ形石器、石刃、石核）
- 伊万里市・白蛇山岩陰遺跡出土品（細石刃、細石核、剝器、石刃）

○〔縄文時代〕

- 伊万里市・白蛇山岩陰遺跡出土品（早期～後期縄文式土器、石鐵、石斧、石刃、石核、スリ石）
- 西有田町・益人岩洞穴遺跡出土品（早期縄文時代土器、各種石鐵、石槍、石膏）
- 伊万里市・金剛島遺跡出土品（縄文時代前期曾畠式土器）
- 伊万里市・源平岩洞穴遺跡出土品（縄文時代後期御領式土器、食糧として使用した貝）

○〔弥生時代〕

- 唐津市・万籾遺跡出土品（カメ棺・弥生前期土器）

- 鳥栖市・田代天満宮遺跡出土品（弥生中期カメ棺）
- 三日月町・土生遺跡出土品（弥生時代各種木器・弥生中期土器）
- 鹿島市・西塩屋貝塚出土品（弥生時代の各種石器）
- 佐賀市・開拓遺跡出土品（中期のカメ棺）

○〔古墳時代〕

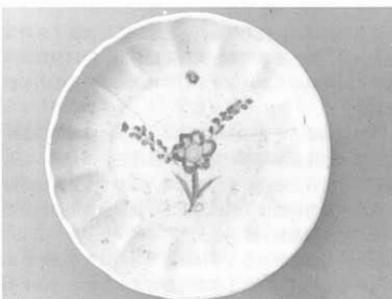
- 唐津市・寺の下遺跡出土品（古墳時代の祭祀用品）
- 中原町・姫方原遺跡出土品（方形周溝墓内出土の各種土師器）
- 鳥栖市・本川原遺跡出土品（方形周溝墓内出土の各種土師器）
- 小城町・丹坂崎古墳出土品（鉄器、鏡）
- 呼子町・ヒサゴ塚古墳出土品（各種土師器、須恵器）
- 唐津市・神集島古墳群出土品（鉄刀、須恵器）
- 伊万里市・錢龟古墳出土品（須恵器、鉄器、各種装身具）

○〔中世～江戸時代〕

- 大和町・西山遺跡出土品（江戸時代初期のスズリ石、滑石製舟）

○〔江戸時代〕

- 武雄市・ウドの谷古窯跡出土品
- 有田町・天狗谷古窯跡出土品
- 有田町・猿川古窯跡出土品
- 西有田町・迎原古窯跡出土品



西有田町　迎原古窯跡出土品

講演会、昭和49年1月26日（土）午後2時、弥生時代から古墳時代へ―その文化と政治の背景―

県教育庁文化財調査監　木下之治氏

目録の発行　展示資料に関する目録を発行する。

観覧料　常設展と併設

個人　大人50円　大・高生30円　小・中生20円

団体　(30)　(20)　(10)

鍋島藩窯展

趣旨

近世日本の窯芸は、新しい展開を見せ、ことに肥前の有田皿山は磁器創成の基点として位置づけられ、ついで色絵磁器を完成し、鍋島藩の保護のもとに磁器の一大産地として発展した。

なかでも鍋島藩窯は、他藩のご用窯にみられない組織と運営のもとに多くの精巧な名品、名器を製作し、近世陶芸史に異彩を放ち、その優雅な品位は、国内外に高く評価されている。

このたび開催の鍋島藩窯展は、色鍋島を中心とする鍋島藩窯の初期、中期、後期の一連の名器のほか、各種関係資料を一堂に展示し、広く一般の観賞の機会とともに、郷土の伝統ある美術遺産を再認識し、本県陶芸文化の向上発展に資する。

主催 佐賀県立博物館

会期 昭和49年3月5日～3月24日

会場 佐賀県立博物館、大展示室

展示内容 鍋島染付、色鍋島、瑠璃鍋島、鍋島青磁、
染付青磁、陶片類、各種図案（絵手本）、
文献資料その他

図録の発行 鍋島藩窯の概要紹介と、資料の一部を掲載した小冊子を発行する。

記念講演会 講演（演題）色鍋島の様式美とその技法
映画・ダブルスライドによる比較映写
・文化庁記録映画
「色鍋島」

講師 永竹 威氏

期日 昭和49年3月9日(土)14時～

会場 博物館中展示室

休館日 毎週月曜日

観覧料 大人50円 大・高生30円 中・小生20円

団体割 20% 10%

本展は常設展と併設して行なう。



染付藩窯絵図皿 径53cm 高10cm



鍋島青磁耳付花器 径15cm 高20cm



色鍋島地文唐花三方割向付 口径12cm 高7cm

第12回研究講座 装飾古墳壁画のしくみ(推移)

東京芸術大学名誉教授 日下八光氏

壁画の研究は、昭和30年に私が文化庁の委嘱で王塚古墳の壁画模写をはじめてから約20年になる。

ここで発表するものは、その20年の歳月をかけてやっとたどりついた結論である。

さて、装飾古墳壁画を見た多くの人の疑問もいろいろであろうが、要約すると

- ① 描かれた文様の意義
- ② 壁画の新旧の序列
- ③ 壁画の藝術性

であろう。

①については、従来も諸説があるが、いずれも推測の域を出す。これを実証的に解明することは容易ではない。③については、実物が存在するのだから、これを鑑賞し、各自の判断にまつべきであろう。ここでは②の問題について述べることとする。

この問題の解決には、先ず第1に装飾の施された石棺・石障・石星形・石壁などについて、考古学的見地から検討しなければならない。

装飾古墳を古順に見ると、最初は石棺系である。なかでも、削竹形石棺・船形石棺・家形石棺の順に壁画を見る事ができるが、九州の装飾古墳は、家形石棺より始っている。

石棺系に次ぐものとして石障系、その次ぎは時代の下降するものもあるが石星形に装飾が施されたものといえよう。展観を見て美しく、おもしろい壁画は、石星形に次ぐ横穴式石室の壁面に絵を描いたもので、装飾古墳壁画の大部分を占めている。

このように現在までは一応大まかな序列はつけられている。そこで、これを踏まえて更に個々の古墳の壁画を研究しなければならない。私は次のような方法でその検討を試みた。

それは先ず、今まで発見されている総ての装飾古墳について、どのような文様が、どのような古墳の、どのような壁面に描かれているかについて詳しく調査し、その結果にもとづいて、各文様の使用された古墳の数と、各文様の消長について検討した。併せて各文様の表現形式や、表現技法について比較研究を試みた。

先ず、一般に抽象形といわれるもののうち、直弧文は、殆んど石棺・石障に用いられ、早い時期に出現し、最も早く消滅している。

円文と三角文は、早くから遅くまで、長期間にわたって最も多くの古墳に使用されている重要な文様であ

る。それで整理上試みに古墳壁画のうち、最も重要な位置にある奥壁に、どのようなものが描かれているかについて検討してみた。

円文についてみると、古い形式のものに小山谷古墳がある。この古墳の石棺蓋には、円文が合計8こ彫られている。まわりが高くなり中央が凹み、中心部に把手のようなものがあり、鏡を表現したものにまちがいないと思われる。

そなへ鏡を表現したものとしては、時期的にはやや下るが熊本県日奈久の長追古墳がある。組み合せ式石棺内壁に円文が刻まれているが、これには内区があり、锯歯文・鉢・上から下るすひもあり、鏡として疑う余地はなかろう。大戸鼻南古墳の石棺にもこれと同じような装飾文様がある。田の川内・大戸鼻北両古墳の石障奥壁と、永安寺西古墳の石星形奥壁などにも円文のみの装飾がある。

日の岡・古畑・寺德・下馬場・塚花塚・報恩寺3号・日田穴觀音各古墳奥壁は、多少の他の文様を混えるが5~6個の大同心円文で飾っている。奥壁のみならず左右両側壁にも多くの同心円文がある。また、この外に、奥壁に具象形が大きく描かれていても、依然として顕著な同心円文を持つものには、珍敷塚・原・田代太田・五郎山各古墳がある。これらはほとんど筑後川流域、あるいはそれに近接する古墳である。なお上記のうち、珍敷塚・原・五郎山各古墳には三角文は存在しない。私は画題に関する分類上、これらを円文系統と呼ぶこととし、三角文に重点を置くものを三角文系統とした。

一方三角文のみの装飾をもつものには、古くは島根県松江市近郊にある丹花庵古墳石棺があり、棺蓋に連続三角文の線刻がる。小さい円文がある大坊・チバサン両古墳は三角文の奥壁をもち、弁慶ヶ穴・釜尾両古墳にも顕著な三角文がある。以上は、熊本県のものであるが、佐賀県西隈古墳の石棺入口左右に、円文と三角文とが線刻されているが、どちらが重要であるのかその比重はつけ難い。これは、円文と三角文が初期の時代の装飾としていかに重要であったかを物語っていると思う。田代太田古墳奥壁の上半部は、王塚古墳に酷似する三角文で飾っている。福岡県王塚古墳では、後室奥壁と石星形の全面を三角文のみで飾り、後室周囲の側壁も穂や櫛の図の間を三角文で埋めている。まさに、三角文系統の雄である。

最近発見された福島県の中田横穴が三角文のみ、宮城県の山彌横穴が同心円文と珠文の彩色壁画であることは、当時としては僻遠の地であり、時代の下降するものであるが、2系統の存在を裏付ける良い例であろう。

蕨手文の最も古いものは、日の岡古墳の奥壁および両側壁のもので、素朴で一重で表現されている。塚花塚のものは異様で大きく、重定・珍敷塚・田代太田各古墳の奥壁にも顕著な蕨手文が存在する。最も華々しい例は王塚古墳で、極度の展開をしている。すなわち、棺床前側



王塚古墳壁画（後室より前室を見る壁面）の復元模写図

面、同右屏風石には連続文様となり、左右燈明台・前室楣石・左右馬の図には多くの極めて美しい現代感覚にも優るとも劣らない藝術手が描かれている。

この文様は、前記6古墳以外には見当らず、田代太田古墳以外は福岡県に集中している。また、この文様は、線刻画や赤一色を使用した古墳などにはないようで、2色あるいはそれ以上使用の彩色壁画の成熟期のみに見られ、極めて短期間で消滅している。

以上の結果から、抽象形のみについて考える場合、多少の例外はあるが、直彌文が最も古く、次は円文・三角文と、これらの組合せで具象形を含まないものが一応先行するものであり、具象が存在しても、3種の抽象形を持つものは、壁画盛期のものとしてよいであろう。

次に具象形についてであるが、そのうち、鞞は前述した円文・三角文に次いで広く、かつ長期間にわたって扱われた貴重な文様であった。このように、鞞が長期にわたり壁画に扱われたために、その新旧の序列を表現形式の変化に求め試みた（主に鞞のアウトライン、すなわち袖に当る両側の張りの線の変化）。そして、その基準として、岩戸山古墳の石人（裏面鞞）・石瓶を選んだ。それは、岩戸山古墳が磐井の寿陵であれば、この鞞が6世紀中葉に作られたものといえるからである。これは、1種の尺度として利用できる貴重なことである。

この鞞のアウトラインを千金甲第1号墳の鞞のそれを比較すると、千金甲第1号墳の鞞はきびしくて、しかもひきしまっている。日の岡古墳の鞞を比べると、抽象的で写実に乏しい表現をしているが、これはくずれた形ではなくて、最も初期の表現であると思う。この比較から、千金甲第1号・日の岡古墳の鞞は、これより古い形式であり、王塚古墳のものは相似して同時期、重定古墳の鞞は線がぐくなり、丸味を帯びて角が取れ、加えて脚が出て王塚に続く。

こうして見ていくと、五郎山古墳のものは日の岡古墳の系統を引き、城本11号・京ヶ峰横穴のものは千金甲古

墳の影響を受けている。塚原塚・珍敷塚・原・大鼠藏東麓各古墳のものは、袖のない簡形の別系統のものである。この鞞も、抽象形に次いで姿を消し、終末期の古墳には見当らない。

この外、船・馬・人物・鳥なども、一般に考えられている以上に早くから出現し、しかも終末期まで扱われている。

船の図のうち日の岡・下馬場・永安寺東各古墳のものは、1本の線で表現した簡単なものであるが、珍敷塚・原・鳥船塚・五郎山・弁慶ヶ穴各古墳のものは大形であり、それぞれ星形状のもの、鳥・馬・人などを乗せているが、表現法は相違している。終末期の古墳には、有明海沿岸の桂原・仮又両古墳のように船ばかりを線刻したものがある。

馬の図も、日の岡古墳のものは原始的な表現であるが、王塚古墳前室の馬の図は最も大きく、力作である。田代太田・五郎山両古墳・泉崎・清戸追両横穴のものは騎馬像である。その他、城本・鍋田横穴には彫刻されたものがある。

人物は、チバサン・古畑両古墳・鍋田・長岩両横穴のものなどは大の字形人物であるが、五郎山・鳥船塚・竹原各古墳・高井田横穴などの人物像は描写力も勝れ、泉崎・清戸追両横穴のように物語り的、あるいは肖像画的表現もあり、終末期の古墳や横穴には、肖像画のような線刻画が多い。

鳥の図は、珍敷塚・鳥船塚・弁慶ヶ穴各古墳のように船にとまつた状態の表現が多いが日田穴観音・ガランドヤ1号・報恩寺3号各古墳には飛ぶ鳥が描かれている。また伊美鬼塚・穴ヶ葉山両古墳を始め、終末期の古墳や横穴には、単独で大きくあるいは多数の鳥の線刻が非常に多く見受けられる。

以上、簡単に具象形の図の変遷について述べたが、なお、表現技術について補足するならば、早期のものは一見稚拙に見ても、素朴であるが厳しさがあり、盛期のものは円熟して華麗である。終末期のものは、崩れさせて生氣に乏しい。

最後に結論としていえることは、既述の抽象・具象の各文様について、その消長とその表現形式、表現技法の推移を照合し、各古墳の壁画を検討するならば、およそその新旧の序列を解することができるであろうということである。

(昭和48年10月13日当館中展示室での講演内容の要約)

(文責 志佐彌彦)

博物館日誌

10月27日	鎮西町役場で「移動博物館」開催（10月29日まで観覧者数 1,128名）	11月25日	満子氏から龍造寺隆信着用と伝えられる鎧及び肖像画等の寄託を受ける。
11月 1 日	九州大学教授岡崎敬氏来館	11月27日	第23回「佐賀県美術展」終了（総観覧者数 10,275名）
11月 3 日	白石町中央公民館で「移動博物館」開催（11月5日まで観覧者数 677名）	11月28日	出納室事務指導監査 「佐賀県高等学校美術展」開場（12月2日まで観覧者数 766名）
	明治大学教授杉原莊介氏、福岡市立歴史資料館長三島裕氏はか「装飾古墳壁画展」観覧のため来館	11月29日	参議院議員鍋島直紹氏ほか来館
11月 4 日	「装飾古墳壁画展」終了（総観覧者数 6,274名）	12月 1 日	「日本近代文学展」開場
11月 5 日	慶應大学教授江坂輝弥氏ほか 3名来館	12月 4 日	鍋島直泰氏ほか来館
11月 7 日	池田知事、河野義克元国会図書館長夫妻来館	12月 8 日	日本近代文学展特別講演会 講師 作家 劇寒吉氏 「森鷗外と九州」
11月17日	第23回「佐賀県美術展」開場	12月 9 日	講師 梅光女学院大学長佐藤泰正氏 「漱石と現代」
11月20日	「鍋島藩窯展」展示打合わせ会（応接室）	12月12日	マルケ展開場（大展示室19日まで）
11月24日	博物館協議会開催（応接室）久保田町村田		NHKテレビ「話題の窓」で日本近代文学展放送

行事お知らせ

展覧会名	会期	観覧料()は团体料金	内 容
休館	1月1日～1月9日	常設展準備のため	
常設展 佐賀県の歴史と文化展	1月10日～3月31日	大人 50 (30) 大・高生 30 (20) 小・中生 20 (10)	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史、美術工芸の資料を系統的に展示し、本県の歴史と文化の特質について一般の理解に資する。
郷土の新遺跡資料展	1月20日～2月8日	常設展料金に含む	県内の遺跡のうち、近年緊急調査、学術調査によって出土した資料を中心に、関係資料を公開、資料とおして当時の人々の生活のあとをかえりみながら、遺跡に対する認識と文化財保護思想の普及と向上をはかる。
郷土の新遺跡資料展 講演会	1月26日 14時から	講師 佐賀県文化財調査監 木下之治氏 演題 弥生時代から古墳時代へ ーその文化と政治的背景ー	
石本秀雄展	2月16日～2月24日	無 料	佐賀大学 石本秀雄教授が3月で退官されるのを記念し、氏の長年にわたる秀ぐれた作品を一堂に集めて鑑賞の機を得るものであり、出品作品は、昭和9年帝展初入選の作品から、日展特選作、日展菊花賞作等を含め、ほとんどが50号以上の大作、話題作ばかり約60点を展示する。
鍋島藩窯展	3月5日～3月24日	常設展料金に含む	わが国の陶磁器史上異彩を放った鍋島藩窯でつくられた色鍋島、鍋島染付、鍋島青磁を中心とし、堺堀陶片も一堂に展示し、藩窯の価値の再認識に資する。
鍋島藩窯演会	3月9日 14時から	講師 水竹威氏 演題 色鍋島の様式美とその技法	

新刊書案内 「装飾古墳の壁画」

一般、開催した「装飾古墳壁画展」の際に発行した図録で、東京芸術大学名誉教授日下八光氏が文化庁から委嘱をうけて制作された装飾古墳の壁画模写図および同復元模写図を中心に、九州、大阪、奈良、福島の装飾古墳60基をとりあげ写真で紹介したものである。

形態 B5版、アート紙、170頁

額布価格 1,000円 申込みは当館へ

博物館報 第18号

発行年月日 昭和49年1月1日

編集 古賀秀男

発行 佐賀市城内一丁目15～23

佐賀県立博物館

印刷 佐賀印刷社